

イエスは何処から来て
何を証示し
何処へ行ったか

松下昌義

— あごらの会 —

イエスはどこから来て、何を証示し、どこへ行ったのか

松下昌義

去る六月十三日に開催された「あごらの集い」の主題は「イエスは何処から来て、何を証示し、何処へ行ったか」でした。この主題をみなさまはどのようにお受けいただいたでしょうか。以下は、この主題を通して私が皆様方と分かち合いたいと願ったことを少し述べさせていただきます。

その前に「あごらの集い」の性格について申しあげておきます。世間には多種多様の「集い」があります。キリスト教会（聖書にしたがってイエス・キリストを救い主と告白し、それゆえに父と子と聖霊にいます神の栄光へと召されている共通した召命に応えようとする教会）にもさまざまな聖礼典（バプテスマ・聖餐）・職制・礼拝形式・その他福音理解があり、さらに一つの教派に於いてもその地域性による〈個性〉があり、福音へのアプローチは多様です。

わたしたちの「あごらの集い」もその求道の姿勢に個性があります。それを一言でいうなら「存在論的根源思考型」と言えるでしょう。以下では単に「根源思考型」ということにします。

さて、「根源思考」について学ぶまえに〈個性〉についての共通理解を確認しておきましょう。

一般的に「個性」とは、「個々のものをそれぞれ特徴づけている性格」と言えます。その意味で、この世に有る人も物もその全てが個々の姿形、相をもって存在し、どれも同じではありません。つまり、この世のものは、それぞれに「個性」をもっているのです。

また、この見える世界は相対の世界、つまり「相対している世界」です。この「相対の世界」は私達の「感性と知性の世界」です。しかし、わたしたちの世界はもう一つの世界が同時にあるのです。それは見えない「靈性的世界」です。その世界は絶対の世界です。なぜなら、絶対の世界は「対立が見えない」「靈性的世界」と言うとおり、形が無く一つの命として滾っている世界なのです。その命が、この世の相対の世界に現れてくると「個々の姿形」に成るのです。それが〈個性〉ということなのです。

これについて禅者、鈴木大拙は次のように語っています。「二つの世界の一つは感性と知性の世界で、もう一つの世界が靈性的世界です。普通一般には前者だけが実在の世界で、後者は「非実在で、観念的で、空想の世界」だと思われている。しかし、「宗教的立場」から見ますと、この靈性的世界ほど実在性をもったものはないのです。それは感性的世界に比すべくもないのです一般には後者をもって具体的だと考えておりますが、事實はそうではなく、それらは吾等の頭で最構成したものです。」（仏教の大意）

要するに、絶対の世界（靈性の世界）では一切の個は超個、無相、無形、純粹、透明、空、として大いなる命のまま滾っておりませんが、その命が絶対の世界に出てきますと個としての形・相をなすのです。ですから「形・相」という漢字は「あらわれる」と読むのです。その意味で「個性」とはこの世にあらわれた「形・相」なのであり、したがって、この世に有るものは皆、必ずそれらしく「個性」を備えているのです。

この世に人間が何十億人いても同じ人はいません。宗教の場合も様々あり、さらに、その個々の教会に於いても、無色透明なキリスト教会は存在しません。個々の宗教に個性があるように、個々の教会にも「個性」があります。それがその宗教の、そしてその教会のこの世に於けるユニーク性（唯一性）であり「個性」なのです。

にもかかわらず、あたかも純粹で、無色透明な絶対の宗教やその教会があるかのように思い込むのは、自分の顔を持たない人間と同じです。それぞれに自分の顔（形・相）はその差異に於けるユニーク性に於いて大事にしなければなりません。そのときその人の人格が成るのです。それと同じように個々の教会は、自分の教会の個性を大切に保持しなければなりません。したがって、その教会の個性に信仰的に共感出来ない場合は他の共感出来る教会で求道すればよいのです。

すこし休みましょう。

×

×

「根源思考型」などと言いますと難しく聞こえますが比喩的な言い方をすれば、樹（見える存在の世界）を見るに、その個々の枝や葉よりも、それらがへ於いて有る靈的場である見えない根っここのところに先ず注目し、そのうえで見えるこの世の個々の枝や葉や花や実（諸々の存在―人間を含めた石ころ、風、水、花、鳥）などを観るといふことです。

樹は見える幹や枝や葉や花や実だけではありません。それらを生み出し支えている見えない「根っこ」があります。樹とはそれらの全体で「その樹」なのです。さらに樹は大地に根づき太陽の光を受け、雨を受け風を受け、その他さまざまな天地の条件との見えない関わりに於いて「その樹」として存在しているのです。これらの「全体性において有る」のが「その樹」即ち「それがそれとして有る」といふことであり、その「全体性の場」から「その樹」を観ることを「根源思考」と言ったのです。

つまり、個々の部分からでなく、全体の場から「それを観る」といふこと、見えない場に於いて有る見える部分の全体を観るといふことが根源思考です。

イエスは人間（この世）をこのように「全体性に於いて」証示しておられるのではないのでしょうか。その意味で、人間（わたし）という現存在は、どこから出て来て、どこへ行くのでしょうか。そして、わたしが生きて有るといふことはどういうことなのでしょうか。

ですから、「イエスはどこから来て、何を証示し、どこへ行ったのか」ということを問うことは、実は「わたしという存在を全体性の場から問うこと」なのです。

ここで唐突ですが、道元の次の言葉を思い出しました。「仏道をならふとはいふは、自己をならふなり」（正法眼蔵―現成公按―）。本当にそのとおりです。私達が聖書を学び、イエスをならい、パウロをならうとは、本来の自己を学ぶことです。もし私達が単に「キリスト教」という一つの「宗教」を学び、その宗教の教義に帰依し、教会の信徒となるためにだけにイエスやパウロを聖書に於いて学んでいるなら、それは「キリスト教」という樹の枝や葉や花や実だけを見て、その根っこを見ない者と同じです。ですから、道元ふうと言うなら、キリストを学ぶとは、イエスが証示した本当の自己（キリスト・大いなる命）に覚めることが大切で、ただ『キリスト教を学んで、その信者』になるだけではない。

ついでながら、道元が先の語りに続ける言葉に注目しておきましょう。「自己をならふとは、自己をわするるなり。自己をわするるといふは、方法に証せらるるなり、方法に証せらるるといふは、自己の身心および他己の身心をして脱落せしむるなり。」

道元の証示の言表は極めて内容が濃縮されており、加えて禪的漢字用語を用いています

ので難解のように思いますが、その文章の流れと響きが自然であるように、内容も極めて自然であり領解できれば、誰でも「本當にそのとおりです」と心底共感できます。イエスの言葉もその点で同じです。つまり、その内容に無理が無く、素直だということことです。

「自己をならふといふは、自己をわするるなり」とは、本當の自己を学び、本来の自己に成らねばならない！、と力み、答えを得よう！、とそれに囚われてはいけません。そのような〈我執〉を捨て、忘れなさい、それが仏法を学び、自己を学ぶということことです。

では、本當の自己、本来の自己は、どうすれば体得できるのでしょうか。それは、「万法に証せられる」ことです、つまり、天地万物に充滿する大いなる命のたぎり（本當の自己・本来の自己）を、眼前の諸々の物事が証示している事実に気づくことです。そのときどの人も、「自己の身心および、他己の身心をして脱落せしむるなり」、つまり、全ての存在が根源に於いて一つであることに開眼し、もはや「われ・おまえ」「主観・客観」の相對の分別がない本當の命（自己）、本来の自己（命）の真相（リアリティー）に気づくのです。このことを禪者、白隠の言葉で言うなら「心ひとつを悟りて見れば、ことうじゃ、そとうじゃの音もなし」であり、また「怒り腹立ち中途の雲よ。上の空には何もなし」、さらには言えば、「煩惱（欲、迷い）嫌うて菩提（欲、迷いを断ち切る）が好きじゃ。好きも嫌いも皆煩惱よ」と、言うことです。これが「自己をならふ」ということだったのです。

以上のことは、「キリストをなろう」という場合にも、そのアプローチは異なっても同じことが言えます。例えば「私に学びたいと思うなら自分の我を捨てて、わたしの後についておいで！」と、イエスは言われ、さらに続けて「自分の我を満足したいと思う者は、それを失う。しかし、……自分の我を捨てる者は自分を救う。自分の我で全世界を得ても自分を失うなら、その人に何の益となるか。」と言われた。（マルコ福音書八・四十三以下）これはキリストに在っての「自己否定が即自己肯定」であることを語っておられるのだが、要するに「自己否定」を経験しないままで、直接的な自己肯定信仰や求道に身を置くなら、その生き方は「宗教風・キリスト教風理想主義的道徳信者」になるだけで、私の満足のために、やたら「人情的な愛」を振りかざします。その結果、根源的な魂の救済への峻厳さを失い、めりはりの無いエゴイスト、つまり「へただのお人よし」になるだけではないでしょうか。

それにしても、人は言うかもしれません。「それは理解出来ないでもないが、とにかくとても抽象的で、現実の生活に於いては夢物語のようだ。非現実的な信仰理解ではないだろうか。そんな「求道」は成り立つのだろうか」と。

はたしてそうなのかは後で学びますが、当の道元は先の語りが続いて次のように記し、この文節を終わっています。「悟迹（ごせき）の休歇（きゅうかつ）なるあり、休歇なる、悟迹を長長出（ちようちようしゅつ）ならしむ」。この語りも読み慣れない言表しですが

その意味は、「悟ったならば、そこでしばらく休むがよい。だが、そこを大きく抜け出して行かねばならない。」（正法元蔵現代語訳・増谷文雄）これは言わば直訳のようで、わたし流に言い換えますと、本当の自己（大いなる命）に開眼したら、悟ったことなど、おくびにも出さずに、相対的なこの世を否定するのではなく超脱したまま、泣いたり、笑ったり、怒ったり、悲しんだり、喜んだりの普通の生活を淡々と過ごせばよいのです、ということなのだと思えます。

ここで道元や白隠さんの語りを紹介したのは、お二人のものを読んでいますと、私にとってイエスが証示した世界が深く領解できるように思うからです。というのは、道元や白隠の宗教理解（宗教的実存）はイエスと同じ所謂「根源思考型」だからです。

わたしたちはときとして聖書を「情報言語」として受け取り理解します。しかし聖書の言語は「証示の言語」です。「情報の言語」とは、そこに記されてあることが歴史的に起った出来事であり、その情報を語る言語のことです。一方「証示の言語」とは、文字や言語では表現も理解も出来ない真実を悟り、証示している言語のことです。その意味で「証示の言語」を「表現言語」と言ったりします。ですから真実（存在の神秘）の世界を証示するという意味において「宗教言語」と呼ばれるのです。

とにかく、聖書の言語はこのような「証示の言語・宗教言語」であり、したがって「聖書の言語」を、新聞が、ある時、特定の場所で起こった事件の情報を客観的に報道するそれと同じ「情報言語」として受け取り、理解するならば、さまざま矛盾が起こってきます。例えば「神のひとり子イエス・キリストは聖霊により処女マリヤより生まれた」という出来事を歴史的な事実としての情報であると信ずることが「本当のキリスト者」で「聖書的信仰」であると、決めつけることもその一例です。そうすると、その情報の真否について、「僕は信じない・私は信じる」などの虚しい不毛の論議が生じ、せつかくの宗教的な真実を証示している「聖書の霊的な世界」が反故（ほご）されてしまいます。

とにかく、証示の言語としての聖書を神の直接的な情報言語として取り扱うとき、聖書が秘めている宗教性を無意味化してしまいます。ここに誤った「聖書主義」の聖書観の落とし穴があるのです。

結局、「イエスはどこから来て、何を証示し、どこへ行ったのか」を問うことは、私（人間）はどこから来て、何故、今生き、どこへ行くのかという存在の神秘を問うことです。聖書はその神秘を証示しており、わたしたちはその神秘を根源思考を通し聖書に於いて全存在的に領解したいのです。

ここでひと休みしましょう。

「イエスがどこから来て、何を証示し、どこへ行ったのか」ということを問うことは「私（人間やこの世の存在の全体性）の存在の秘密」に開眼することになるのです。

いずれにしても、新約聖書（イエス・パウロ・ヨハネ）を学ぶことは自己を学ぶことであり、その学び方はさまざまです。私達の「あごらの集い」の学び方（求道の仕方）は、先に申しましたように「根源思考型」です。そして、この学び方（求道の仕方）に共感なさる方々が集われるのが「あごらの集い」であって、その他の求道の仕方に共感なさる方は、それぞれの仕方と求道の場所でなさればよいのです。その意味で「いろいろな個性の教会」が在っていいのです。つまり「この学び方（求道の仕方）だけが正しい」という絶対的なものは相対的なこの世には無いのです。

それにしても、一般的には「根源思考型」の求道のし方をなされている教会や集いは比較的少ないのではないかと思います。そして、従来のキリスト教の伝統的な教義を唯一絶対のものだと信じ、同語反復することで「安心」しておられる方々からは「根源思考型」の求道は抽象的で非聖書的、反キリスト教的だと思われる方もあるようです。が、それは従来の欧米型キリスト教理解が〈完結した解釈〉だという思い込みの枠内からの発想ではないでしょうか。

何事に於いても、一度自分の頭と心と体に刷り込まれた観念や思惟や信心の枠組みから開放されるのはとても困難なことです。特に宗教信仰に於ける捕囚はトラウマとしてその者を縛り、閉鎖的（考えることを失う）となり、従来の教えが完結したもののよう思い込んでしまいます。それを狂信（マインド・コントロール）または呪縛（呪縛）といふのです。これらはすべて歪んだ自我が生み出す幻想です。

真の宗教はこのような歪んだ自我から、人間を開放し、真っ当な自我の確立へ促し導く。天然自然の智慧に開眼させる働きなのです。イエスの根源思考はパウロを律法主義信仰の呪縛から開放させました。

六月十三日に開催されました「あごらの集い」のおり、私のお話の参考資料をさしあげました。その資料の最初に「場所論的な見方」を神学者の八木誠一氏の解説文を用いて少し紹介させていただきましたが、ここでは私の解説を加えて記しておきます。

ユダヤ教から生まれたキリスト教がヨーロッパにおいて結実し、そこで「正統的キリスト教」となり世界に伝播しました。そのキリスト教で説かれた神は人格主義的な神でありその象徴は「父」また「天」と対象化して提示されました。それに対して「場所論的な神

の象徴」は「母」また「大地」です。遠藤周作はフランス留学から帰国して以来、西欧的キリスト教が「日本人の体に合わない洋服」だと感じて、「母の宗教」としてのキリスト教を文学者、小説家として求め続け、その作品をとおして多くの日本人の共感を受けました。また同じ時に修道のためフランスの修道院に入った井上洋治神父も厳しい修道のなかで、なにかしら違和感を覚え日本に帰国後、そのしっくりこない自分の内なるものの何かに目覚め、結局人間を大地に根ざすもの、大いなる命の場に於いてあるものとして、捉えるようになりました。そしてそのことを信仰の書として著し、多くの日本人に共感を与えつづけています。両者とも、日本の伝統を媒介としてキリスト教に接した結果、西欧的キリスト教に於いては「母なるもの、大地なるもの」が失われたことに気づいたのです。

つまり、両者とも、いきなり「日本の伝統」という異質なものをキリスト教に持ち込むうとしたのではなく日本文化を媒介として、伝統的なキリスト教が失っていたものに気づいたといえます。また国際的な聖書学者である有賀鉄太郎氏の「ハヤトロギ」論（キリスト教を存在ではなく生成の範疇（カテゴリー）で解釈する試み）も場所論的に近い。

キリスト教が単なる伝統的権威の信奉でも、単なる思い込みでもなく、理解可能で、かつ、ここから納得のいくものであることを了解したのである。その意味で、聖書のイエスを深く知るとき確かにイエスには場所論的な神理解が隠されていることに気づくのです。いうならば「根源思考型聖書理解」をするとき「場所論的神と人理解」に通じること

になるのです。パウロに於いても最後にそのような神理解に通じるものを私なりに強く感じます。

そして、私なりの信仰に於いてイエスはこの全体を包む創造的な大いなる命のたぎりの場をキリストとして行じ証示されたのだと領解しています。その命の場においては「部分に対抗した包括、であると同時に包括という対立項を越えた真の包者」つまり大いなる命のたぎりなのだと言えましょう。その場では全ての宗教と対話が出来、この世の存在者（物）と共生出来るのです。イエスはそのような大いなる創造的な命の滾りを生きられ、証示なされたのだと思います。このようなイエス理解を「根源思考型求道」と言っているのです。

ここで一言 「場所論的神理解」という言葉に注目しておきましょう

ひと息いれ、少し休みましょう。

さて、この度の主題は、ルカ福音書二十四章十三節〜三十五節に記されてある二人の旅人がエマオの町に向かう途上、復活のイエス・キリストに出会う物語を読んでいたときに与えられました。なお、この同じ出来事をマルコ福音書は「二人の弟子が田舎の方へ歩いていると、彼らにイエスは別の姿で現れた」と簡単に、しかも補足的に記されているだけ

です。(マルコ十六章十二節)

さらにルカ二十四・十三〜三十五についてブルトマン(一八八四〜一九七六・ドイツのプロテスタント神学者・二十世紀最大の新約聖書学者の一人)は「キリストはここで―昔神々が質素な人間の姿で、例えば旅人の装いで、人びとの間をさすらうのを好んだように―旅人として、知られることなく現れ、彼の秘密に満ちた神性を個々の特徴に於いて啓示する。しかし気づかれるや否や、姿を消し去るのである。この物語の構図は、最古の神頭現と全く類似している」と、彼の著書「共観福音書伝承史」に発表しています。そして、その「注」の部分で、「ルカがこの物語を編集する以前の元来の部分は十三節、十五節b、十六節、二十八〜三十一節から成りたったいた物語である。と言っている。(ブルトマン著作集2・共観福音書伝承史Ⅱ一四三ページ)

ということとは、このイエス・キリストの復活物語が歴史的事実か否かということではなく、また、歴史的事実であったから、ということでもなく、ここで語られている物語が証示している宗教的な世界(靈的世界・言語を越えた超越の世界・隠れた真実の世界)が人間(私達)の実存に深く語りかけてくるのです。これが「神話」ということであり、聖書に於いては旧約聖書の、アダム神話、洪水神話、などがあり、さらに夢、幻、預言、新約聖書の黙示思想的部分なども同じです。そして復活物語も一つの「神話的表現」だといえ

ましよう。このような神話的物語を非科学的だと一笑して否定するのではなく、そこに秘められた命の神話的表象を実存的にしっかりと靈的に聞き取り受け取る（解釈する）事が大切なのであります。これが「証示の言語」「宗教言語」としての「聖書を読む」と言うことです。このような見解を聖書学的、神学的に発表したのがブルトマンの「新約聖書と神話論」でした。この研究は世界のキリスト教会に大きな衝撃を与えました。時に一九四一年のことです。その後十年程して日本でもブルトマンの研究がすこしづつ紹介され始め彼の著書の翻訳本や解説本などがキリスト教書店等に出るようになりました。わたしもそのときブルトマンの非神話化論に接し大層興奮し感動し読みました。が、当時、神学生として身を置いていた私の周囲の方々（生徒や教師）は全くの無関心で、むしろそれは悪魔の学問だと即座に拒否されたことはとても残念に思います。その方たちが無視し拒否され、「悪魔の教えである」と断じられる理由は、「非聖書的」だからだと言つのです。そして、彼らは、

聖書は神の言葉であり、聖書に記されてある出来事はすべて歴史的な出来事で、それを事実として信ずることが「聖書の信仰」であり、クリスチャンの信仰と求道にとってそれだけで充分であり、それ以外の「神学的営為は全く必要なく、それは非聖書的で、悪魔の業である」と確信しておられる方々です。つまり聖書の言葉を神について、人間について、歴史（過去・現在・未来——世界の創造と終末——）について、十全に記されてあ

る完結した書と信じていらっしやるのです。つまり、直接神からの「情報言語」として解する聖書観、即ち聖書即神の言葉とする聖書観に基づいたキリスト教信仰をお持ちのようです。私自身はそれについて正否は申しません。が、ただ一つ危惧することは、「聖書」も含め目に見えるものは全て「世界内の相対的な事柄」であり、聖書学的研究の対象となり、ブルトマンの研究結果に、その賛否に関わらず謙虚に耳を傾けるべきで、始めから、「それは悪魔の学問だ！」と否定する態度は、狂信者の類に等しいと思います。ですから、ブルトマンが提示した研究成果を受け入れるか否かに関わらず、その成果を踏まえたくうえで聖書に目を向けるのが「聖書を学び教え指導する者」の最低の責任だと思えます。

とにかく、目に見える世界内の相対的なもの自体を、宗教の、そして自「己」の信仰の、さらに、自「己」の存在の唯一絶対の拠り所、または根拠とすることは、この世の相対的なものの絶対化であって、その事自体極めて「この世的であり世俗的」だと思つのです。

この世に現れ出た事柄は、それがどれほど偉大なものであっても、すべて過ぎ去り消えて無くなる相対的なものです。ですから、私達は、この世の出来事と、その出来事が証示することを混同してはなりません。聖書の言葉を直接的な神の情報言語として、その言語を即神の言葉とすることこそ「聖書の信仰」というなら、そこでは真の意味で宗教

的生の根拠としての「聖書の信仰」は成り立たないと思ひます。なぜなら、そのような信仰は極めてこの世的、世俗的レベルの発想です。この一点はとても大切なことです。

パウロは次のように告白しました。「わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくからである」と。(コリントⅡ、四・十八)

この世(世界内)のものはずべて、見えない創造的な大いなる命のたぎりの場から表れ成ったモノ(形)であつて、それを「文化」「文明」「自然風土」とも言えましょう。先の樹の例で言えば、この世のものは、幹、枝、葉、花、実のたぐいだと言えます。つまり表れ成ったさまざまなるモノ(形・個)なのです。ですから、それ自身の個でありながら、それは同時に、表れ成らしめて大いなる命を証示しているのです。このことを、先に紹介しました道元の言葉に置き換えますと次のようになります。

ここでは、原文と現代語訳文と共に、少し解説を加えて紹介しておきます。

なお、参考資料として増谷文雄、石井恭二両氏の「現代語訳正法眼蔵」を用いました。

文
字
の
間

「而今の山水は、古仏の道現成なり、ともに法位に住して、究尽の功德を成せり。空劫已前の消息なるがゆえに、而今の活計なり」
— 正法眼蔵・山水経・道元 —

「いまの山水は、古仏の言葉の顕現である。山も水も本来のありのままの場にあつて、
真実を究め尽くしている。それはこの世界の成立以前の消息であつて、今もなお活
きているのである」

「尽十方世界に森々として羅列せる長短方円、青黄赤白、しかしながら経卷の文字な
り、経の表面なり」
―同上・仏経・道元―

「すべての世界のいたるところにずらりと列んだ長短方円のもの、青、黄、赤、白、
のいろとりどりのものが、すべてみな経文の文字ならざるはなく、経文の文字づら
ならざるはない」

これらの道元の語りについては、イエスの根源思考を学ぶうえで、大切な示唆となりま
すので、後でもういちど一緒に考えてみようと思います。

尚、ここで、参考の為に空海が著した「声字実相義」という書物の有名な一節と私流の
解説文を添えておきます。

「五大皆響有り、十界言語を具え、六塵悉く文字、法身これ実相」

「全宇宙は創造的な大いなる命で滾っていきおり、力ある言語を発し、文字無き文字で充
満している。これこそが本当の世界の姿なのである」

そして、聖書の詩篇の人は次のように讚美した。

「もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はその御手の業を示す。その日、言葉をか
の日に伝え、この夜、知識をか夜の夜に送る。語らず言わず、その声、聞こえざるに、その
響きは全地にあまねく。その言葉は地のはてにまでおよぶ。」（詩篇・十九篇）

と言つことは、聖書もこの世の人の言葉の一つでありつつ、同時に神（存在の根底・大
いなる創造的な命）を証示する言葉でもあるのです。その命を聖書の言葉において気づく
ことが「聖書を読む」ということです。ですから「聖書の言葉それ自体を即神の言葉」と
することは、ただの聖書を偶像化する「聖書崇拜教」にしかすぎません。

眼に見えるものに於いて、眼に見えない大いなる命に気づくことが、樹の場合「樹を見
る・樹を見た」ということです。そのことが「樹という存在の全体（神秘）に気づいた」と
いうことなのです。イエスが「空の鳥をよく見なさい。野の花を注意して見なさい。」
（マタイ六・二十六以下）と言われる意味も同じです。それがイエスの言葉を聞く、とい
うことです。

このへんで少しやすみましよう。

イエスにおいて「空に飛び交う鳥」「野に咲き匂う花」は、大いなる命を証示しているものであって、大いなる命そのものではありません。つまり、真理がこの世でとる形と真理そのもの（大いなる命）とは、はっきり区別しなければなりません。つまりそれは「不可同」です。しかし、同時にそれは「不可分」なのです。

両者は同じではありません。が、同時にそれは分けることは出来ないのです。その有り様を「相互内在である」と八木誠一は言表します。さらに、その関係は大いなる命による大決定（神の支配の場）が先行しているという意味で「不可逆」であることを滝沢克己は指摘した。私は、それに共感します。

さらに、鈴木大拙（一八七〇～一九六六・宗教哲学者、仏教学者）「大拙は東洋の伝統的思想である仏教の核心に、精神と物質の二元論では捉えられない靈性の自覚を見出し、それが世界性を持つとの確信に基づき、禅をはじめとする仏教思想を広く米国はじめヨーロッパなど、海外に紹介した。この『靈的自覚』とは『（即非の論理）の経験的体得による。』（即非の論理）とは『AはAでない、故にAである』と推論式であり、それは、前半は同一律による意識の立場の否定であり、後半は相対を越えた靈性の絶対的肯定を表す。大拙の生涯の思想は『靈性的自覚』をめぐってなされた」（哲学思想辞典・一 頼住光子）

鈴木大拙の思想を語るほどの器量はわたしにはありませんが、彼の〈即非の論理〉は、

正に、見えるものと見えないもの、この世のものと超越(神)との関係が、的確に証示されていると思います。例えば、「鳥は鳥で無い、故に、鳥であり。花は花で無い、故に、花である」という推論は、まさに、イエスが「花をよくよく見なさい。鳥を注意して見なさい」と、提示することで、証示しようとなされた「靈性的自覚」への促しと同じであると云えます。その同じ靈的自覚を八木も滝沢も、道元も、パウロも、西田も鈴木もそれぞれ求道で体得し、それぞれの言葉で証示したのです。イエスはその靈的自覚を、「見えませんか!。聞こえますか!」とおっしゃった。しかし、ユダヤ教の律法(聖書)学者も、祭司さまも、パリサイ宗の熱烈信仰者も、結局「見ても見ず!、聞いても聞かず!、悟ることは出来なかった」(マタイ十三・十三) それどころか、イエスを悪魔の頭だと断じ、十字架刑に処し、惨殺してしまったのです。

正統と言う体制化された教条主義的宗教の中で安心し、判断停止(深く考えることなく)排他的独善に落ち込んだ愚かさと恐ろしさを、今さらのように思い、厳しく自省する次第です。結局、自分も他人も開放されることが無かったのです。

一息いれて、すこし休みましょう。

×

×

ここで、少し立ち止まって、問題の中心点について確認しておきましょう。と、申しますのは、「結局、わたしたちは何を問うているのか？」ということですよ。私達とは、すべての人間のことです。

その人が、それを自覚しているか否かに関係なく、自分の人生に於いて背負っている根本的な問いがあります。それは、「見えるもの、と、見えないものとの関係」についてです。

私達は、自分が今、生きている、存在している、ということとは自覚して知っています。なぜなら、見て知っているからです。しかし、自分が生きている、存在している根拠については、何も知っていない、否、知り得ないのです。なぜなら、その根拠はまったく見えないからです。

その意味で、私達は自分の存在の根拠を知らないまま生きてる者ではないだろうか。気がついたら生きていたのが自分です。だからその自分を生きるよりほかない。つまり、私達は自分がどこから来て、どこへ行くのか知らないまま今、今を一生懸命に生きているのです。どれほど考えても「見えるのは今」しかないのです。過去は夢のよう、また、未来はただの願望、まさに、結局、見えるのは「今」という瞬間だけであって、過去も未来も見ることとは出来ません。

過ぎ去れば皆夢、一寸先は暗闇。自分はどこから来て、どこへ行くのか、そして何のた

めに生きているのか。自分という存在の根拠は何か、そのすべてが見えないのず。

何度も申しますが、私達が見て知る事が出来るのは「今」という瞬間だけです。ですから「人生は幻化に似たり、ついには、当に空無に帰すべし」（人生とは幻のようなもの、現れたかと思うと、あとかたもなく消えて、なにもなくなってしまふのだ）と言う名言が中国（陶潜・帰田園居）にあるそうですが、これは、確かに人生の現実であり、そのとおりだと共感なさる方もおいでの事と思います。

しかし、私達はこのような人生の見える現実にあっても、なおへ見えるものを越えた見えない現実の働きがあるのではないか、と予感するのです。それは次のようなことです。

上記のような人生についての見解は、「存在の形態」つまりへもの存在やその行動の有り様へ、言い換えればへ見える部分へだけについての一つの結論です。しかし、「存在の形態」ではなく、そのような存在の形態を、形態たらしめている、そのへ存在自体へ思いをはせるとき、存在の形態、人生の形態の根っここの見えない不思議な世界が見えて来るのです。

存在の形態を問うことは、樹の例えで言えば、枝ぶり、葉の様子、花の状態、実の形などに見える部分の有りさまを問うということです。それを人間の存在の形態でいうなら、人間の身振りや言葉づかい、笑顔や、やさしさや、親切さ、愛情などの様々な形態です。

しかし、存在自体を問うとは、樹の場合、目に見える部分だけでなく、見えない根こやその樹を樹たらしめている大地風土の働きとの関係、それが「於いて有る場」を問うことなのです。人間の場合で言えば、自己の存在の根拠を問うということです。

ヘブライ的な「存在」概念は、つまり「有る」ということは「成る」（有賀鐵太郎・有とハーヤー）という「創造的な大いなる命のたぎりそのコト」であります。つまり、ものごとの全ての様態は、創造的な大いなる命そのコトの場、言い換えれば、創造的な大いなる命の海という場に「於いてある」モノなのです。しかし、その場は誰にも見えません。その創造的な命のたぎりの場について、イエスは次のように証示されました。

「神の支配（創造的神の命の滾りの場）は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに（天然自然に）実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである。」（マルコ・四・二十六―二十九）

すべての見えるものを、それたらしめる眼に見えない「創造的な大いなる命のたぎりの働きの場」をイエスは「神の支配」と言われたが、その命の場をイエスは「隠れたところ」

と言われた。(マタイ六・六) その創造的な命の滾る神の場は誰にも見えない、一切の人間の認識能力を越えて「隠れている創造的な命の滾り場」です。ですから、樹は知らないうちに育ち、人が寝起きしているあいだに、ひとりでに(天然自然に)ゆたかな実がでる。人はただその実を鎌を入れて受けるだけである。このまぎれもない事實は、人間の存在に於いても同じです。気がついたら私は、私という人間として存在し、生きられるように設えられていた。それを受けて日々生きるだけの存在なのです。ですから、存在の様態は、存在自体の創造的な命の滾りに於いて生じて来る第二のことなのです。

その意味で、存在の様態と存在自体とは同じではないのです(不可同)。しかし、存在自体を離れて存在の様態は起こり成ることはできません(不可分)。しかもその関係は、存在自体が第一であって、存在の様態は第二なのだ(不可逆)。滝沢克己的に「見えるものと見えないものとの関係の奥義」を言い表すことができます。ついでに申し添えておきますと、滝沢氏はその関係を「インマヌエル・神われらと共にいます」と言い、西田幾多郎氏は「絶対矛盾的自己同一」と言い。八木誠一氏は「相互内在^{上レの}」。また鈴木大拙氏は「即非の論理」で、武藤一雄氏は「問・ホモロゴス」と言表なされた。私自身は私の器量と宗教的実存に於ける求道の立場から「創造に於ける人間の自然」と言っております。

以上のように、見えるものと見えないものとの関係をしっかり領解して、ものごとを見ることを「全体性に於いて見る」というのです。存在論的な根源思考とは、このことなの

です。

すこし休みましょう。

×

×

存在の全体性に気づかないままで、人間の生き方としての倫理的、道徳的な部分である愛とか、赦しとか、犠牲とか、忍耐とか、寛容……などの徳目だけに眼を向け、それらを自己の生きる根拠であるかのように思い込み、単にヒューマニストとして生きることを宗教信仰者であると勘違いしている方がおられます。しかし、ヒューマニズム的発想と宗教的な発想とを混同してはなりません。なぜなら、ヒューマニズム的発想は、人間それ自体で神的存在に成り得る者だという人間観に基づく理念に価値を置く人間中心の発想（自我）から生じたものであり、宗教的発想は人間の知性と感性とはへ見えない靈的包括者の命の働きに於いて在るもの（だ）という宗教的な開眼（徹底的な自己否定）に基づくものです。つまり、人間存在の本当の根拠、根柢は自我より深い見えない超越的な靈的包括者にあり、単なるヒューマニズム的発想は自我が作る理念であって、それは一種の願望であり、人間存在の根拠とはなり得ないものだということです。

（理想を自我的）

ヒューマニズムそれ自体は尊重すべきことです。しかし、宗教的立場からみると、それ

は存在の様態として第二のことなのです。第二の事とは、それを軽視する意味ではなく自己の存在自体の奥義に開眼することによって自ずから（自然に）その個々に於いて現成してくる存在の様態にすぎないという意味です。

イエスは、存在の様態についてではなく、その様態が証示する存在自体、つまり存在の様態を様態ならしめる、その根柢、つまり根っこそのコト（神の支配）に開眼することを促がされたのです。この一点はとても大切なことです。ですから、イエスは次のように言われた。

「何よりも（一番先に）神の支配と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな（自ずと）付け加え（増し加え）られるであろう」（マタイ六・三十三）

「神の支配」を先ず求めなさい。とイエスは言われる。この場合の「求めなさい」とはただ、与えて下さい、と熱烈に求めよ！、ということではなく、「捜し求めよ」ということであり、その結果「気づく」、「開眼する」、「自覚する」ということに連なる内容の言葉であることを知っておきましょう。

ここで、ついでながら「神の義」について申し添えておきますと、それは、先の種の成長の譬え話（マルコ・四・二十六以下）にありましたが、蒔かれた種がへ人の知らない間

に、それがそのように必ず成る！、神の創造的な大いなる命の働きへのコトを「神の義」と言います。ですから、「神の義」も、「神の支配」と同じコトの言表しです。

「何よりも（一番先に・最重要なのは）神の支配と神の義（必ず、それをそれ足らしめ成らしめる創造的な大いなる命の働き）に、気づき、その大いなる命こそが、自己の生きる本当の支え、根拠であることに目覚めよ！」と示されたのです。その意味でイエスが証示する信仰とは「信」と同時に「覚」であると言えます。

私達の思い煩い（愛さねばならぬ。赦さねばならぬ。信仰の人なら〇〇であるはずだ！、などという脅迫観念も思い煩いの一つである）はどこから出てくるのでしょうか。それは自分を支える本当の支え、根っこ、根柢、即ち「神の支配・神の義」に開眼していない自我から生まれて来て自分を縛るのです。

も他人をも

大地に生えている草木の根がしっかり大地に根づいているなら、草木の見える部分が少々痛み、折れたり枯れたりしても、心配する事はありません。その草木は死んではない。時が来れば以前より力強く新しく芽吹いてくるのです。「神の支配とその義の内にある」ということは、これと同じです。（ヨハネ十五・一〜六）

人の知恵と努力に関係なく、刻々とたぎりつづけているその神の創造的な大いなる命が天地に満ちて万物を生かしている。この事実（リアリティ）を、イエスは「神の支配」と証示なされた。そして、その命のたぎりは、へ必ず完成されるといふ神の義に保持され続けて行くのが自己の生の現実であることに開眼した者が「信仰の人」です。だから信仰の人パウロは次のように告白します。

「キリスト（神の支配と神の義、即ち、神の創造的な大いなる命）が、あなたがたの内に主体として働いておられるならば、体は罪によって死んでも、霊としてのあなたは義によって命となっています。イエスを死者のなかから復活させた方の霊が、あなたがたの内に主体として働いているなら、あなたがたの内に躍動している霊によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かしてください。」（ロマ八・一〇以下）

再度言います。「神の支配」は、人が生み出し、作り出したものではない。また、観念で思い込んでいる確信でも信念の産物でもない。それは、まったく自分ではない、自分の知性も感性も肉体も越えて、自分の生の現場に一方的に無条件に、自分の内と外、全存在を元から支え包んでいる大いなる霊的命の力なのです。その意味で、その大いなる命自体が「思い煩うな」と発語しているのです。「お前が、思い悩んだからといって、お前の寿命をわずかも延ばすことができようか」と、その大いなる命自体が言うのである。（）

マタイ六・二十七)

しかし、この神の支配のリアリティーに開眼しない人は、恵みの水の直中に居ながら、自分の居る場所に気づかず自我を振りかざして渴きを癒そうともがいている人と同じです。ですからイエスは、「あなた方は聞くには聞くが悟らず、見ても見ず、結局、癒されることはない」といわれた。(マタイ十三・十四以下)

「神の支配はいつ来るのか」と熱烈信仰人がイエスに尋ねた。イエスつぎのように答えられた。「神の支配は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の支配はあなたがたの只中にあるのだ！」(ルカ十七・二十)

このような神の支配のリアリティーに開眼した者は、思い悩んでいて、その実、思い悩まない。泣いていて、その実、泣いてはいない。なぜなら自分の生の主体(根拠と根柢)として現に躍動している創造的な大いなる命(キリスト)を自分の内に信仰により開眼し体得しているのですから。つまり、その者は自分の命が、自分のものであって、その実、自分のものではなく、神のものであることを体得し開眼しているのです。このような神と人との関係の奥義を「神、共にいますーインマヌエル」・「相互内在」・「絶対矛盾的自己同一」・「超個の個」・「即非」・「間」などと、多くの真摯な求道者の方々は、それぞれに集約した言葉で言い表し推論なさる。後で申しますが、私はわたしの器量で「創

造に於ける自然」と言表しています。

結局、人生に於ける根源的な問いは、見えるものと見えないものとの「間」に生きている自己の真実・自分という存在は何か？ ということであり、その存在の秘密を先達の方々は真剣に求道し、その果を以上のような言い表しで提示してくださったのです。

少し休みましょう



イエスは人間の生き方の様態の個々の事柄（例えば、愛・親切・寛容・赦し・自己犠牲（など））について教えられたのではなく、人間の存在そのコトの根柢を証示されたのです。私達の宗教的根源思考の求道のあり方はこの一点に眼を注ぎ、この一点を共有したいのであって、信仰人としての個々の生き方の様態は、共有し開眼した宗教的な実存理解に基づいて、個々人がその場、その場で各自の信仰の智慧をもって決断決定なさればよいのです。そのことを、イエスは、「何よりも神の支配と神の義とを最優先に捜し、開眼しなさい。そして、開眼したならその他の事については、開眼した知恵に基づいて、各自は必要に応じて、必ず対応できるように導かれるようになります。（増し加えられる）」と示された。その意味で、キリスト者の生き方はさまざまであって、この世の見える世界の何かを唯

一の根拠、または最優先にして、「キリスト者は〇〇であるべきだ！」などと力み、その在り方で、自分も他人も統一してしまうなら狂信となります。これは主義や主張に生きる方々、キリスト教を倫理的ヒューマニズム的に理解する方々に多くおいでのようです。パウロはこの形の生き方（律法主義的生き方）を宗教的生き方だと思い違いをしていましたが、その根本的な誤りをイエスが証示した「神の支配」（創造的な大いなる命）に開眼することによって、律法主義的ユダヤ教の唯一絶対主義の熱狂的信仰から開放されたのです。もし、パウロがイエスに出会う事がなかったなら、彼は鼻持ちならない偽善的な傲慢人間になっていたか、それとも、熱烈ヒューマニストが行き着くであろう原理主義がもたらす絶望の淵に陥ち込んでいたに違いないと思います。その意味で、彼が告白する次の言葉は深く重たいものです。

「わたしたちは見えるものでなく、見えないもの（神の創造的な命の働き）に心をかけ眼を向けます。なぜなら、見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです」。（コリントⅡ、四・十八）とパウロは告白しました。

先に、私達の誰もが、人生に於いて抱えている最大の課題は、「見えるものと、見えないものとの関係を見極めること」である、と申しました。人が自分の人生をどれほど智慧

をしぼって賢明に生きていても、人生（人間存在）の根源的な奥義を人間の知性と感性（自我の配慮）によって見極めることはできません。まさに人生は不思議に満ち満ちているのです。

結局、私達が自分の知性（自我）を先立たせて見える世界を歩もうとするなら、一寸先は暗闇となり、次の瞬間に思いもかけない事、予想もしないこと、想定外のことが起こり、すべては覆（くつがえ）されます。まさに人生は人間の知的な配慮を越えた見えない霊的な命の内に在らしめられているのです。

その意味で、この世の見えるいかなる物も人も、勿論人から生まれ出る主義も主張も愛も宗教（聖典という文字）も私達の存在の最後の支え、根拠とはならないのです。その事が歴史的現実として明確に突きつけられたのが現代状況です。

「人間理性の灯火を高く掲げよ！」という人間中心主義の標語のもとで近代合理主義の扉が開かれたのがヨーロッパに於ける十六世紀のルネッサンス運動でした。それは人間を世界の中心・人間は万物の霊長とみなす人間観・世界観です。この趨勢は、この世の見える世界は人間の知性と感性の力、つまり、理性の灯火を高くかかげて進んで行けば必ず理想の世界（地上天国）即ち、科学に於いて、政治に於いて、経済において、宗教や道徳、文化全般においてヒューマニテイの満ちる世界となり、その世界を現出来る、という確

信でした。

しかし、その確信のもとで突っ走って来た人間や世界が結局どの様に成ったか、その悲惨さは近代の歴史をひもどけば明らかなことです。科学は目先の便利さを人類にもたらしましたが、核の問題だけでなく、あらゆる分野で人間性を阻害する問題を生み出していきます。また政治や経済、そして宗教にいたるまで、人間のエゴイズムに振り回され、愚劣さをさらけ出し、人は、富と時間の消費の主体として享樂的人間として生きることだけに生き甲斐を求め、その為には、親はわが子を殺し、子は親を殺すという、人間性に於いて最悪の現象が社会で日常的に起こり、それ以外の事（国家や民族・宗教間）に於いては言うまでもありません。まさにすべての面に於いてエゴイズムが蔓延し、地球全体が存亡の危機に瀕しているというのが今日の人間をとりまく状況です。

にもかかわらず、なお、人間は自我（知性と感性）を振りかざして、この現前の危機的状況を乗り越えられると思ひ込んでいます。それは、従来の意識枠（パラダイム）内からの発想であって、その延長線上には救いはありません。なぜなら、見える世界だけに存在の根拠と価値をおいて生きて来たその生き方の意識枠（パラダイム）自体に決定的な誤りがあったからです。その意識枠の崩壊が現代状況なのです。ということは、新しい意識枠の生みの苦しみの時代でもあるといえよう。

では、新しい意識枠（パラダイム）とは何なのだろうか。

ひと息つきましよう。



現代は、ヨーロッパに於ける十六世紀以来五百年続いて来た知性主義的人間観の限界が露になった時代であり、同時に、新しい意識枠（パラダイム）が求められ、その生みの苦しみの時代であると申しました。その生みの苦しみのしるしとして、最近（一九六〇年台を境として）思想の分野で、また一般に於いて、「神秘主義」が盛んに論じられ、巷に於いても「神秘主義」に関心をいだく人達が増えています。つまり、この現象は見えている世界だけの論理—理性で自己を規制し、社会・経済を管理し歴史を方向づけ、を管理し、人生を見極められるという論理—への疑問と不信のあらわれだといえます。それは、既成の意識枠の否定であり、新しい意識枠への模索が、勢いへ見えない神秘の世界へ自己の生の確かな根拠を求めるようになったということです。その意味で「神秘主義」が台頭してくるのは、既成の意識枠の転換期の現象だと専門家は言います。

このような神秘主義の台頭は、一見、見えない靈的なものへの関心として、宗教性との関わりがあるように思われますが、そこには宗教の陥し穴がひそんでいることに気をつけねばなりません。なぜなら、見えるものだけへの関心を持つことの問題性は、所謂「見えるもの」が問題なのではなく、見えるもだけに、自分の生きる根拠をおく、ことが問題な

のであって、台頭して来た「神秘主義」への人々の関わり方には、未だに、見えないものに於いて、見えるものを求めようとしているエゴイズムの延長線上の出来事のように思われるのです。その神秘体験への関心は麻薬体験願望とかわらないレベルの好奇的なものようです。それは既成の自我中心的な意識枠から抜けしていないといえます。

たしかに「見えるもの」は、分かりやすく、肉体的五感的には直接的です。まさに、それは「眼には美しく、食べるに良く、賢くなるには好ましい」自我を満足させるものです。

(創世記三・六)

人間の自我の様々な欲望（金銭欲、物欲、知識欲、権力欲、精神的な安心欲、肉体的な充足欲等々）を満足させる最も相応しい具体的なもの、それが「見えるもの」です。

再度、言います。「見えるもの」が「悪いもの」だと言うのではない。問題は、見えるものに自己の生きる根拠と価値を与え、本当の生きる命の根拠、人間を本来的な人間へ生かす究極的な生を成り立たせる命を見失わせるそこに問題があるのです。旧約聖書のアダムとエバの失樂園神話が証示すること、また、イエスに於ける荒野での誘惑の物語が示すことは、まさに、人間をして存在の本当の根拠を忘却せしめ、エゴイズムの暗黒へ導き、最後にニヒリズムの淵へ埋没させることへの警告であったのです。

見えるものに於いて自己満足、即ち、自己の存在の命の手応えを得、充足することは出来ません。見えるものは、自己の生の根柢にはならないからです。ここに、見えるもの限界があります。しかし一方、自我は無限に自己充足を求めます。問題は、決して自我を充足させることが出来ない見えるものに、自己充足を求めつづけると言うこと。ですから、そのような生き方には、不安と不満がつきまとい、それ故に、常に安心できる生きる根柢を模索して、より強烈な見えるものへの偏執が深まり、遂には他人を平気で殺害することによって自己の存在の手応えを得ようとする独りよがりの狂気に暴走することになる。そして平然と「誰でもよかった！」と、その者は言う。しかし、彼は決して充足する事はない。

今日の人間は、自分の生きている根柢を見失ってしまったのです。それは、眼に見える山海の珍味で満腹になっても、その心は満たされない不安を覚える自分に生きているのと同じです。そして、その自分の存在の不安を解消するために、更なる目に見える刺激を求め、遂に人肉を食べる狂気を犯しかねない。そして、その結果は空虚感だけが残る。

とすると、問題は、ただ見えるものに於いて自己の存在の手応えを得ようとするこの誤りではなく、先述のとおり自己の存在の本当の根柢を見失ってしまった、そこに問題があると言えます。

それは、人間としての自分の存在（人格）の见えない可能性、自分の存在（人格）の见えない本当の根拠と本質に出会い、気づいていない、という一点に根本的な問題があるのです。

一息入れて、少し休みましょう。



イエスは次のような証示をなされた。

「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つひとつの言葉で生きる」（マタイ四・四）

これはイエスが福音宣教を開始される直前に、荒野に導かれて、そこで悪魔に幾つかの誘惑（試み）を受ける場面で語られた言葉の一つです。ここでは上記のイエスが証示された言葉に焦点をしばって、これまで述べてきたこととの関連で考えてみましょう。

それにしても、皆さんはこのイエスの証示をどのように理解し受け留められますか。

こう言う言葉を聞くと、私達は「パン」つまり、肉体を支える大切な見えるものである食の是非について信仰人、宗教的求道人の立場から考え論じてしまいがちです。真実を求めらる者にとって「パン」とどのように関わったらよいのか、それは絶対必要か否か、などと

賢そうな論議を真面目な顔をして真剣に議論します。しかし、イエスは、そのような事は是非を論じておられるのではなく、人間がパンを食って生きている存在自体のその場が、どれほど恵みと祝福に満ちた場であるかということを示しておられることが、イエスの主題なのだと思います。

人間が生きるためには「パンも必要だが、神の言葉も必要です」などという折衷主義的理解をイエスは誘惑者である悪魔に語っておられるのではない。常識家的信仰人はときとしてこのような合理主義的理解をして満足します。また熱狂的な信仰の人は、パンなど、どうでもよいのだ！、靈魂の救済こそ最もたいせつなのだ！、と力みます。しかし、それらはひょっとすると、誘惑者悪魔の手にすでに操られている者の言動ではないでしょうか。

イエスが上記のとおりのおえを、どのような状況でなされたのか、マタイ福音書は次のように語っています。

「イエスは悪魔から誘惑（試み）を受けるため、靈に導かれて荒野に行かれた。そして四十日の間、昼よ夜も断食した後、空腹を覚えられた。すると誘惑する者が来て、イエスに言った。「神の子なら、これらの石をパンになるように命じたらどうだ！」。それに対するイエスのおえが上記のとおりのお示されたのです。

とすると、私達はこの誘惑者とイエスの問答の主題が「パン」についてであると思ってしまう。しかし、この問答をよくよく見つめますと、「パン」に関わることではなく人間が生きているということの根源、つまり人間の存在の根拠に関わることなのだ言うことに気づくのです。

つまり、悪魔はイエスをして、自己の生きる根拠、最後の支え、拠り所は「パン」である、と告白させたいのです。つまり、生きる根拠を見えるものにだけ求めさせること、これが悪魔の誘惑の内容なのです。

肉体的存在者である人間にとって「パン」という見えるものは、切実なことです。食わなければ人間は死ぬのですから。「パン」だけではなく私達は、この世の見えるものすべてとの関わりなくしては誰も生きることができない存在です。その意味で、ここで言われる「パン」とは、この世の見えるもの全体を象徴した言葉だといえます。ということとは、悪魔がイエスに「これらの石がパンになるように命じたらどうだ！。あなたは、神の子なのだから出来る。」と言ったその企みは、神の子としての宣教師イエスを、この世の見えるものに縛りつけ、この世をパン（見えるもの）だけの世界にしてしまおうとする誘惑であったと言えましょう。

これに対してイエスは何と応えられか。それはイエス自身にとって、また、私達人間に

とって最大の問題だといえます。イエスは悪魔に対して毅然と証示なされた。

「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つひとつの言葉で生きる」

このイエスの証示について、古来、多くの方々が多様に解釈してきました。その一部を先に紹介しました。が、ここで再度確認しておきたい基本的なことは、イエスの応えは、「パン」の是非を論じてはおられない、ということです。先にも申しましたが「パン」の是非について論議するならば、それは、この世の見えるものに人間を縛りつけようとする悪魔の誘惑にまんまと誘われてしまったこととなります。「生きるために神的なものも必要パンも必要なものである」などと常識的で合理的な解釈をする者は、およそイエスが証示する靈的な世界に縁なき人だと思えます。

イエスの証示の中心は、存在の眞の根拠であり、究極的な拠り所は何であり、その創造的な大いなる命が何処で滾り躍動しているかということ、即ちそれ「神の支配と神の義」というその一点なのであって、「パン」というこの世で見えるものについてはありません。

「パン」という見えるものの象徴一般のものは、神の支配、創造的な大いなる命のたぎりに於いて生み出される個物にしかすぎないものです。したがって、神の支配と、その大

いなる命によって生み出されたこの世の見えるものとき、横並びにして、神の言葉とパンと比較して、どちらが大切か、などと論じることは、およそ宗教を論じるに相応しいとは言えないのでは、と思います。

両者の関係は後で述べますが、横並びに比較出来る関係ではなく、上下の関係なのです。そしてそれは、同じではなく、しかし、分けられず、しかも不可逆なのです。つまり、この世の見えるものは、所詮は、この世の見えるものです。しかし、それは同時に、見えない創造的な大いなる命の現れであり、その全体でもあるのです。

その意味で両者は「絶対矛盾的自己同一」だ、という西田幾太郎（ニッポウ）の言い表しは、一見難しいようでありながら、両者の関係的存在を的確に言い表した言表だと言えます。つまり、イエスが証示なされた一点はそこにあつたのです。後で時間があれば申し上げますが、イエスの十字架の贖罪死の解釈もそのことを言い表した一つだったと言えます。

(ところが、伝統的なキリスト教会は、イエスの十字架による贖罪死そのことが唯一の人間救済の出来事である！、と力み、その宗教的な解釈に呪縛されてしまう排他的独善的信仰がキリスト者を一般社会から浮き上がらせてしまっているのですが、彼らはそのことに気づいていないようです。大切なことは「贖罪信仰」が秘めている意義の何たるか、に深く開眼することであつて、イエスに於いて起こった歴史的な一つの出来事自体を排他的、絶対的な救済の根拠とすることは狂信に近いのではと思う。その唯一性に異をはさむ者を

悪魔呼ばわりするならその宗教はカルト的だといえます。特に、日本に於けるプロテスタント教会の方々は世界でも珍しいほどに贖罪信仰に頑迷でいらっしやるように思うのですが、皆さんはいかが思われますか。)

少し休んでお茶でも頂きましょう。

×

イエスが誘惑者(悪魔)に対して応えられた「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と証示について、言うならば「根源思想的」に一緒に学んでまいりましたが、もう少し進めてまいります。

×

上記の、悪魔に対するイエスの証示の後半の言葉はとても大切です。それにしても「神の口から出る一つひとつの言葉で生きる」とは何を証示しているのでしょうか。

そこで、順序として「生きる」ということについて学び、それから「神の口から出る言葉」について学びましょう。

先ず、ここで言われる「生きる」とは、私たちが本来的な人間として肉体的にも精神的(知的・靈的)にも生き活きと生きるコト、を指しています。これについてテサロニケの書簡に記されている次の証示は大切なヒントになります。

「どうか、平和の神ご自身が、あなたがたを聖なる者（本来的な人間、創造に於ける人の自然態）にしてくださいませるように。まあ、あなた方の霊も魂（知性）も体（肉体）も何一つ欠けたところのない整ったもの（バランスよく構成されているもの）として神に守られ、保たれますように」（テサロニケⅠ、五・二十三）

つまり、人間が生き活きと生きている状態とは、靈性（存在の超越的・神的な根拠に開眼せしめ成就する働き）と魂性（人間の知性）と肉体性とが一体となって機能している状態のことであり、そこに人間性の本来の在り方（創造に於ける人間の自然）があり、真つ当な自我が現成するのです。しかし、これらのバランスが崩れ、そのうちの一つだけが他の働きを無視し突出してきますと、人間の自我は忽ち不安定になり〈歪んだ自我〉に成り下がるのです。例えば、魂性（知性）だけが先立ちますと合理主義的自我高揚をもたらし、人間理性中心主義に陥ち込み、人間は傲慢の極みに達し靈性が枯渇し、その結果ニヒリズムの暗黒に陥ち込んでしまいます。また、肉体性が先立ちますと我欲の満足だけを求め、互いに競い合い、享樂を貪る餓鬼道の世界に陥ち込み、秩序無き混乱が世界に蔓延することになります。さらに、正しい知性と肉体性の在り方を無視した靈性への傾倒は、人をこの世から浮き上がらせ、幻想の世界へ誘い、非社会的、反社会的な観念的な独善宗教を生み出してしまいます。近年私達の国に於いてもこのような宗教集団が国家転覆を計画し、

地下鉄道の電車の中でサリンをまき、多数の死傷者を出した凄惨な狂気を行い、未だにその宗教集団は生き残って活動しているようです。これに類する宗教集団が多々あり、世界的規模で凶暴化し、国家規模で猛威をほしいままにしている疑似宗教国家が存在していることは周知のことです。

結局、イエスの前に現れた「悪魔」とよばれるそれは、神の創造に於ける人間の自然性、人間の魂（知性）と肉体と霊性のバランスを狂わし破壊する誘惑者なのだと云えます。

この誘惑者（悪魔）に対してイエスは、人を本来的な人間として生き活きと生かすものは「神の口から出る（発射される）一つひとつの言葉で生きるのだ！」と宣言なされた。つまり、人間を生き活きと生かす根拠と原動力が「神の口から出る（発射される）一つひとつの言葉である」とイエスは証示なさる。その意味でイエスが証示なさる「神の言葉」とは、単なる説明や解説のたぐいではなく、発射されたその言葉自体が、創造的な大いなる命へ人を開眼させ生かす力としての言葉なのです。

私たちは、「言葉」というと、人が日常用いている言葉につなげて考えます。また、聖書の文字としての言葉とかさねる方もおられるでしょう。しかし、イエスが証示される「言葉」とは人間を先立たせた言葉ではありません。ときとして聖書文字主義の方は、書か

れた聖書の文字そのものが直接に不思議な力がある聖なる文字と理解し「聖書！聖書！」又「聖書的！聖書的！」と騒ぎ立てます。しかし、それは、書かれた聖書の文字と、その言葉が証示している神的・靈的な内容とを同一視する根本的な誤りを犯していることに全く気づいていません。さらに、聖書の言葉と神の言葉とは、「非可逆的な上下の相互内在の関係」なのであって、それは横並びの関係、つまり目に見える聖書の文字が、そのままで神の神文字なのではありません。このような聖書文字崇拜主義者の聖書理解と信仰には、どこか、律法主義、教条主義、原理主義的な人間の思い込みを先立たせた〈浮つき〉を感じるのはわたしの偏見でしょうか。

イエスはそのような律法主義者（熱烈聖書文字主義者―フアリサイ派のユダヤ教の先生方）に対して次のように指摘なされた。

「あなたたちは聖書の中に永遠の命があると思ひ込み、聖書を研究している。ところが聖書はわたし（神の創造的な大いなる命―キリスト―）について証示をするものだ。それなのに、あなたたちは、その命を得るために、わたし（創造的な大いなる命）のところに来てその命を得ようと思わない。（ヨハネ福音書五・三十九―四十）

しかし、このイエスの宗教的な深い祈りと願いととは彼らに通じず、イエスを律法（聖書）を冒瀆する者、神に齒向かう悪魔の頭として、十字架刑で惨殺すること、私達は神の真理と正義とを貫いた」と思い込んだのですから。頑迷に自我で思い込んだ「信仰心」は

ど恐ろしいものではありません。イスラム原理主義者の自爆テロを遂行する者が、自分を聖戦（ジハード）に参加する者と位置づける熱烈信仰人のことを想います。彼らのその独善的な宗教信仰の思い込みによって、多くの同胞の善良な子供や大人が殺害されている現実に思いを馳せることが無いほど、その人間性は破壊され歪められているのは、恐ろしく、哀しいことである。ヨーロッパ中世に於いて当時の教会が真摯な求道者達に行った異端審問とその処刑の凄惨を忘れてはなりません。宗教信仰は一つ間違えば、何時も何処に於いても、神の名による恐ろしい悪魔的な陥し穴を秘めているのです。

注・ここで、イエスが言われる「わたし」とは、歴史的な存在としての「イエス自身」のことではなく、イエスをイエスたらしめている「ロゴス」、即ち、創造的な大いなる命それ自体のことである。これについては後で学びます。

再度言います。聖書はそれ自体書かれた文字の一つにすぎません。しかし、書かれた文字が秘め、証示しようとしているその命に開眼（悟）させられるとき、聖書の言葉は、まさに神の言葉となり創造的な大いなる命と力とが流露する場となって、どの人も本来的な生き方へと活き活き生かす原動力となるのです。そのリアリティーをイエスは「人は、神の口から出る（発射される）一つひとつの言葉で生きるのだ！」と証示されたのです。

ですから、書かれた文字とその文字が証示することを混同してはなりません。単に書かれた文字の聖書をどれほど読み守っても、その文字が秘め証示しようとする靈的な事実（力・リアリテイ）にその者が開眼（直接經驗）していないなら、その聖書の言葉は、その者を縛る教えの言葉となるだけです。律法主義信仰（聖書文字主義信仰）の悲劇（偽善）はここにあるのです。イエスの律法主義宗教学人への痛烈な批判に一切の力みを捨てて静かに耳を傾けてみることは大切だと思います。（マタイ二十三・十三以下参照）

注・聖書をどのように観るかという立場の一つに「聖書逐語靈感説」というのがあります。この立場の人達は、聖書の言葉は一字一句逐語的に神の靈感をうけて書かれたものであり、それはそのまま絶対の真理であり、完結された文字だとします。その論拠は「聖書はすべて神の靈の導きのもとに書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導くに有益です」というテモテⅡ、三・十六の言葉に求めます。この聖書無謬説の聖書観を持つ人達をファンダメンタリスト（根本主義者・原理主義者）と言われ、彼らは自らを「福音派」と言い、極めて保守的な聖書解釈をします。「聖書的・聖書的」と主張する立場の方々も同じ場合が多いようです。

注・「聖書は神を証明するのではない。神が聖書を立てるのである。」と言った人がい

ますが、そのとおりであり、「聖書は神を証示しているのであって、その証示されている真実（神）に開眼（悟）した者だけが、聖書が何であるかを正しく領解することができるのです。単なる聖書という書物（文字）自体をこの世の書物と同列に置くなかで、特に聖書だけを「真理の書」と自我で思い込み、聖書を生きる唯一の根拠、又は規範とし、人の在り方、生き方を統一するなら、まさに「命をもたらすはずの聖書が、人を死（虚無）へ導き、聖書を偶像に貶めることになります。（ローマ七・九以下）

また、少し休んでお茶とお菓子でも頂きましょう。

×

×

イエスが誘惑者（悪魔）に対し「人は、神の口から出る一つひとつの言葉で生きる」とと証示されたそれは「神の口から発射される霊の息吹（言葉）で生かされるのだ！」という内容です。その意味で「神の言葉」とは、神の創造的な大いなる命、意志、力、決定力そのもの、つまり、神の口から発射される言葉は、「神の創造的な霊的命として現に生きており」、その出来事自体が神自体なのです。この事実をヘブライ人への手紙の著者は次のように告白しました。

「万物をご自分の力ある言葉によって支えておられる」（ヘブル一・三）

「神の言葉は生きており、力があって、いかなる両刃の剣よりも鋭く、関節と髓とを分

かつ深みまで貫くほどに働き、そして、人の心の思いと欲とを忽ち見破ってしまふ」（ブル四・十二）

「わたしたちは、この世界が神の言葉によって創造（造形）され、従って見えるものは、目に見えているものから出て来たのでないことを、信仰によって悟るのです」（ヘブル十一・三）

この一点はとても大切です。心を落ちつけて以下を注意深く求道しましょう。

神がいて、その神が語る言葉を「神の言葉」と考えてはなりません。神がいて、その神が義を行ずるわけではありません。「神の言葉」それ自体（聖書の文字ではなく、見えない霊的なロゴスそのコト）が創造的な大いなる命であり、力であり、智慧であり、意志であり、光であり、真理であり、創造的な命（必ず成る命）のたぎりであり、究極の決定力なのです。

ヘブライ的に「神がある」とは、「ただ神が超越者として存在している」ということではなく、「ある」と「成る」とが一如であるコトをいうのです。（「有とハーヤ」有賀鐵太郎）

この創造的な命の躍動自体をイエスは「父さん」と呼び、「わたし」と言われた。さら